



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

サウジアラビア：スルターン皇太子の逝去に伴う王族の大規模人事異動

研究員 河井明夫

10月22日のスルターン皇太子の逝去により、サウジ王族間の主要人事の刷新が進められている。

同月28日にナーイフ第二副首相兼内相（78歳前後）を皇太子に任命したアブドッラー国王は11月5日に複数の勅令を発表し、大幅な人事異動を行った。その中で最も注目を浴びたのが、故スルターン前皇太子が1962年より掌握していた国防・航空相兼査察総監（Inspector General）のポストであった。今回の勅令で、国防・航空省および査察総監局（General Inspectorate）は国防省に統合され、その大臣に、故スルターン前皇太子の実弟でリヤード州知事のサルマーン王子（76歳前後）が任命された。

また、サルマーン王子の後任のリヤード州知事には、1968年から同州次官（deputy governor）、1979年からは同州副知事（vice-governor）としてサルマーン知事に仕えてきた異母弟のサッターム王子（70歳前後）が昇格する形で任命された。リヤード州の知事職は、単に首都リヤードを擁する地方行政のトップという座にとどまらず、サウード家の故地であるナジド地方の諸部族の利害調整というサウジ王政の安定にとって重要な役割を負っている。

<漸進的に進められる世代交代>

近年、90歳近くのアブドッラー国王を始めとする主要王族の高齢化に伴い、アブドルアジーズ初代国王の息子の代、所謂「第二世代」（物故者も含めて36人と言われる）から孫の「第三世代」への世代交代の必要性が叫ばれてきた。その模範たらんとしたのか、アブドッラー国王は1963年以来、自らが長官を務めてきた国家警備隊（National Guard）の長官職を昨年11月に、息子のムトイブに「世襲」した。そのため、今回もスルターン皇太子兼国防・航空相兼査察総監の逝去を受けて、同皇太子の息子ハーリド国防・航空次官（62歳）がその

まま国防相に昇格するとの見方もあった。1990-1991年の湾岸危機・戦争の際にアラブ多国籍軍の司令官として勇名を馳せたハーリド王子は、その後、出過ぎた行動などが嫌われ、ファハド前国王らから遠ざけられたとも言われていた。近年では、2009年11月にイエメンの反政府武装組織「 Houshi Group」がサウジ南部に越境攻撃を仕掛けた際に、その駆逐作戦を指揮したが、翌2010年2月に停戦協定が調印されるまでにサウジ兵100人以上が戦死するなど、結果的にハーリド王子は自らの武名に傷を付けるとともに、アブドッラー国王を苛立たせたとも言われていた。

しかし今回、アブドッラー国王は、ファハド前国王に続きスルターン前皇太子が亡くなったことで今やステイリー・セブンの間で最長老（80歳前後）となったアブドルラフマーン副国防・航空相兼副査察総監を「本人の求めに応じて」（サウジ国営通信）辞任させ、その甥に当たるハーリド国防・航空次官を副国防相（閣僚級）に昇格させている。

こうした人事からは、アブドッラー国王の頭の中には、自らの死後のサウード家の体制として、既定路線となっているナーイフ新皇太子の国王就任、そして主要王族による「バイア（臣従の誓い）委員会」（注：同委員会の仕組みについては、中東分析レポート R11-T016「スルターン皇太子逝去と後継問題」<http://www.meij.or.jp/members/public/research-fellows/20111102180835000000.pdf> をご参照）でサルマーン国防相を次期皇太子に選出させる一方で、内相、国防相などの主要ポストをそれぞれナーイフ現皇太子兼内相の息子ムハンマド内務次官、ハーリド新副国防相らの第三世代に円滑に引き継いでいくという絵図が構成されつつあることが想像できる。

2005年8月のファハド前国王の逝去直後にアブドッラー現国王が「第二副首相」を指名しなかった前例は注目に値する。同国王は、スルターン皇太子の病状悪化、国王自らの健康問題も重大になりつつあった2009年3月ようやく、本命候補だったナーイフ内相を第二副首相に任命した。巷では、サルマーン新国防相の第二副首相任命を「期待」する声が高まっている。アブドッラー国王がどのタイミングで第二副首相を任命するかに注目が集まる。

<サルマーン新国防相の人物像>

サルマーン国防相はサウード王家内の「ステイリー・セブン」と呼ばれる有力閥閥の調整役、即ち「番頭」的役割を果たしてきたという評判がある。また、リベラル派ビジネスマンでコラムニストのフセイン・ショボクシーは、11月7日付アッシャルクルアウサト紙掲載のコラムで、サルマーン王子の国防相任命は「多くの者にとってサプライズではなかったと言っても過言ではなく、むしろ大衆の願望に近いものだったと言えよう」と評している。

<国防省の組織改編と新国防相の手腕>

今回、国防・航空省および査察総監局を一人の有力王族が掌握していた状態に変更を加えたことの含意は深いものと思われる。

この改編により民間航空の事業・任務は旧国防・航空省から民間航空庁に移管されることになった。これに伴い、国防省の大幅な組織再編が見込まれている。

また、米国を始めとする大規模武器購入契約の窓口となっている国防省は、大きなカネが動く場でもある。2010年10月には、総額600億ドルに上る米国からサウジへの武器売却契約が米議会に通告された。それにはボーイング社製の新型機、F15戦闘機、ヘリコプター等が含まれると報じられた。今年4月にサウジを訪問したゲイツ米国防長官はアブドゥラー国王と同契約の進捗状況について協議した。

こうした巨大な金額が国防省を通じて動くことに伴い、故スルターン皇太子兼国防・航空相には、「ミスター10%」という、武器取引に伴うリベート料に由来する不名誉な異名が付けられていた (Roston, Aram. "The Way We Live Now", *The New York Times*, December 22, 2002)。その息子のバンドル元駐米大使も、英国BAE社との武器取引「ヤマーマ」プロジェクトに関する汚職疑惑の矢面に立たされ、2007年に、当時サウジにとって「目の上のたんこぶ」であったカタールのアルジャジーラ衛星テレビから執拗なネガティブキャンペーンに曝された。

こうした国防省の「腐敗」したイメージを払拭できるか否か、サルマーン新大臣の手腕が問われることになる。

<今次勅令に関するその他の主要王族の人事異動>

- リヤード州副知事（閣僚級）：ムハンマド・ビン・サアド（第三世代；内務省顧問）
- 皇太子府長官兼皇太子特別顧問（閣僚級）：サウード・ビン・ナーイフ（皇太子の息子）
- 民間航空庁長官（閣僚級） ファハド・ビン・アブドゥラー・ビン・ムハンマド・アール＝サウード（民間航空担当国防・航空次官）

○皇太子兼副首相を国家安全保障会議（NSC）副議長とし、国防相を同議員とする（参考：議長は国王。事務局長はバンドル元駐米大使）。

（以上）